

(様式)

令和4年度 学校評価 学校関係者評価書

学校名	三木市立口吉川小学校
1 学校教育目標	学びの楽しさ あふれる子の育成
2 本年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none">・基礎・基本の定着を図り、自らすすんで求め、主体的に学習に取り組む態度を育成し、対話的、深い学びにつなげる。・思いやりの心をもって、互いの良さを認め合い励まし合う態度を育成する。・特別支援教育における組織的支援体制づくりと啓発促進を図る。・心身ともに健康で、粘り強く取り組み、やりぬく児童を育成する。・教育の専門家として、指導力・組織力の向上に努め、積極的に研鑽を積む。・小規模校の特性を生かし、保護者・地域の願いを大切にし、信頼される安全で安心な学校づくりを進める。

3 自己評価結果(達成状況) 【 A:達成している B:概ね達成している C:あまり達成していない D:達成していない 】

評価の観点	評価項目(取組内容)	取組(達成)の状況	評価	改善の方策
学習指導	○「確かな学力」の向上 ・学習規律と基礎・基本の定着 ・児童が学習の見通しを持ち、主体的かつ意欲的に活動したり表現したりする授業づくり ・学習習慣の定着 ○学習意欲や知識の定着につながるICT機器の活用 ・授業におけるタブレット端末の活用 ・タブレットドリルの積極的利用	<ul style="list-style-type: none">・児童の実態を踏まえつつ、学校教育目標に立ち返る研究主題を設定した。児童が主体的に学習課題に向き合い、思いや考えを進んで表現できるような学習過程をつくるために、単元を見通して計画を立てたり、課題意識や目的をはっきりさせたりして、児童が意欲的に活動できるようにした。また、「学びの楽しさあふれる」すがたを捉え、表出場面や表出条件をまとめた。・今年度も学習意欲や表現力の向上をめざし、また学習交流の場として、朝の時間に「いきいきタイム」を設定した。継続的な取組の結果、各学年の学習成果の発表に対する意見や感想を積極的に発言する児童が増え、学年を越えた意見交流が活性化した。・昨年度と同様、児童の実態や発達段階に応じた身につけさせたい力や家庭での協力依頼内容を明記した「ともに育てよう口吉川子(家庭学習の手引き)」を各学年で別様式に改め、保護者への啓発を行った。また、児童用手引きも同様に作成し、家庭学習のあり方について指導した。児童、保護者ともに、家庭学習の積極的な取組に関するアンケートの回答は0.1ポイント上回った。・授業内での活用は、教員だけでなく子ども自身が扱う場面が増え、学習意欲の向上に役立っている。具体的には、インターネット検索を使った調べ学習の拡充、文章作成や表計算、意見集約等のアプリを活用する姿が多く見られる。・AIドリル導入に伴い、2学期から毎週木曜日、昼休みから掃除の時間までの30分間に『修行の時間』と称し、個別学習に取り組む時間の設定をし、活用を進めてきた。	B	<ul style="list-style-type: none">・昨年度より改善が見られ、「見通しをもつ授業づくり」が子どもたちの学びに有効であったと考えられる。一方、個別最適化された学びや協働的な学びの在り方について模索していく必要がある。本校の実態を踏まえたアプローチを模索したい。・来年度は、三木市が提唱している「未来を創る学力育成プログラム」に基づき、小規模校というメリットを生かした「探究」について研究していく。総合的な学習の時間、生活科のカリキュラムを見直すとともに、異年齢集団での学びの中で、「主体性・協働性・創造力」の育成や全教職員で取り組んでいく。・来年度もいきいきタイムなどできるだけ全校生の前で発表、表現する場を大切にしていこう。その他には完成品の掲示だけでなくとどまらず、壁面ポर्टフォリオ等を活用し、学びの足跡を掲示することで、さらなる交流活動の内容を検討する。・「ともに育てよう口吉川子(家庭学習の手引き)」を引き続き活用する中で、子ども自らが「学びの楽しさ」「学ぶことによるメリット」を実感できるような手立てを検討し、「学びの責任者は自分」であることの自覚を促していく。・タブレット端末は、学校生活の活用場面も増えてきているため、操作方法や情報モラルや情報リテラシーと共に、プログラミク的思考を育成する内容を検討していく。・児童自らが学ぶ内容、学び方を選んで学習する「修行の時間」を中心に、朝の学習で実施していた内容や方法を再検討し、タブレット端末を積極的に活用していく。
道徳教育 人権教育	○自他ともに尊重できるこころの教育 ・道徳の時間の充実 ・親子人権学習をはじめとした、さまざまな教育活動を通じた人権教育の推進 ・異年齢集団による主体的・創造的な取組の推進	<ul style="list-style-type: none">・道徳の学習課題に対して、しっかりと考えをもっている児童や、学年を問わず優しく関わることができる児童が多い。また、あいさつや言葉遣いなど、指導が実生活に結びついているところもある。保護者アンケートにもそのことが表れており、日々の活動が道徳性や人権感覚の高揚につながっているといえる。・約1か月間の人権期間を設定し、友だちのよいところを見つけ、みんなで共有する活動に取り組み、学習発表会では保護者にも公開した。また、親子人権学習やPTA人権講演会を実施し、発達段階に応じた人権課題について学んだり、心温まる時間を過ごしたりすることができた。・異年齢集団活動は、6年生が様々なアイデアを出して実施内容を工夫し、全校生が協力して楽しく活動できた。また、複数の班での合同遊びや全校遊びなども計画し、感染状況や安全面を考慮しながら、状況に合わせた活動形態の工夫も見られた。	A	<ul style="list-style-type: none">・道徳の時間に学習したことが、児童の実際の生活での判断力や実践力につながるように、授業研究による道徳の学習の充実や指導のあり方の共通理解を図る。また、全教育活動を通して人権感覚を高める指導を推進する。・人権期間、親子人権学習の実施については、今年度の内容を振り返り、より有効な方法、学習内容を追究していく。・教職員の人権感覚を磨くための研修の機会を設定し、全教育活動を通して、自尊感情や思いやりの心を育みながら人権教育を推進していく意識を高める。・異年齢集団活動の実施方法については、今年度の方法を継承し、振り返りや計画を大切にしつつ、研究の方向として位置づけている「探究」活動との連携や、児童会や委員会など班の枠にとらわれない新しい提案をしたりするなど、内容面のさらなる活性化を図る。
生徒指導	○児童一人一人に寄り添う生徒指導 ・全教職員による児童の共通理解 ・いじめ、不登校に関する組織的な取組 ・基本的な生活習慣と規範意識の確立	<ul style="list-style-type: none">・一人一人の児童に寄り添うために、学期に1回、「心の健康観察」(生活アンケート)を実施した。また、実施後にすべての児童に対してその結果をもとにして担任からのヒアリングを実施し、必要に応じて聞き取り内容を全職員で共有した。・問題行動があった場合には関係職員で集まり、複数の目で今後の対応を検討した。・生活目標を意識して児童が生活を送れるよう、児童会や委員会と連携し、児童による啓発活動を行ったり、生活目標を児童玄関前に拡大掲示したりした。・長期休業明けに少しでも早く学校生活のリズムを取り戻せるよう、「生活ふり返りカード」による自己評価を取り入れ、各休業明けに実施した。・月に1回生活指導委員会をもち、児童の実態の様子の共有を行い、対応を検討した。また、「口吉川子のくらし」の内容が児童の実態や時代に適しているかを検討し、修正した。	B	<ul style="list-style-type: none">・来年度以降も「心の健康観察」を実施し、実施に応じてヒアリングも行うことで、児童の内面を把握できるように努める。そして、職員間の共通理解、児童の実態に応じた長期的な指導のため記録を保存し、次年度に引き継げるようにしていく。・今後も問題行動発生時には迅速な報告・連絡・相談を行い、複数の目で対応を検討する体制を維持していく。・来年度も児童会や委員会と連携し、生活目標の意識づけを図りたい。・長期休業明けの学校生活をスムーズに送れるよう、「生活ふり返りカード」の取組を継続したい。また、ゴールデンウィーク明け等、活用の範囲を広げることも検討したい。・来年度も児童の実態や時代の変化などに合わせて、「口吉川子のくらし」の内容を検討する。
特別支援教育	○個に応じた教育の実践と体制づくり ・支援の必要な児童への適切な対応 ・交流及び共同学習の推進	<ul style="list-style-type: none">・個別の指導計画や教育支援計画を作成し、会議等で児童の様子を話し、共通理解をして、全教職員で全校生を育てている。支援の必要な児童の保護者への連絡を密にし、専門機関に相談する機会を設け、通級指導を始める等、児童に合わせた指導に当たった。・教室環境を整える、学習に関するルールを決める、授業の見通しをもたせる等、ユニバーサルデザインの考え方について周知し、児童が学習しやすいように配慮をしている。・ここにこウィーク(特別支援学級の教室公開)を通して、特別支援学級の児童と通常学級の児童、教師との理解や啓発を図った。特に、交流学級の児童は、日々の生活や授業で積極的に関わりたい、理解を深めている。	B	<ul style="list-style-type: none">・児童の実態をより理解、把握し、個に応じた適切な支援に努めるために、保護者との連携を密にする。特に支援が必要な児童については、より細やかな対応をするために、専門機関との連携を図り、教育相談の内容や発達検査結果のフィードバックをしてもらい、学校でできる支援を継続的に共有し、実行していく。そして、個別の教育支援計画や指導計画を随時更新して引き継ぎ、児童がより充実した生活を送れるようにしていく。・特別支援学級の児童は、来年度は一人学級になるが、今年度に引き続き、交流学級だけでなく、他学級との合同授業や学校行事などを通して、お互いの理解をさらに深めていく。また、教師も積極的に関わっていく。
安全・防災教育	○安心・安全な学校づくり ・防災教育の推進 ・安全指導の実施 ・感染症対策の実施	<ul style="list-style-type: none">・火災や地震を想定した避難訓練では、事前に訓練時刻を児童に知らせず、それぞれ昼休みおよび登校直後に実施したが、教師の指示に従って落ち着いて避難する児童の姿を見ることができた。特に、登校直後で教室までたどり着いていないなど周囲に友だちや大人がいない環境、様々な場所で訓練を開始する状況においても、自分自身で命を守る行動をとることができた。頭を守る意識づけに関しては、ランドセルや座布団など衝撃を吸収しやすい物を用いた守り方の事前指導をしたため、昨年度は半数ほどの児童だったものが今年度はほとんどの児童が改善した。・気象警報や悪天候および感染症拡大による臨時休校を想定したドライブスルー方式の引き渡し方法は、家庭に周知、職員同士共通理解できている。今年度は、3年に1度の地域防災を実施し、児童や職員だけでなく家庭も一緒に訓練ができた。・不審者対応訓練では、昨年度に引き続き、三木署の方を招き、児童は身の安全を確保する方法、職員は主に不審者に対峙した場面での具体的な対応を学ぶことができた。・感染症対策に有効である手洗いについて、児童への指導を行った。また、保健掲示板や保健だよりを活用し児童や家庭に啓発を行った。学校備品の整備等についても、昨年度に引き続き充実させている。	A	<ul style="list-style-type: none">・避難訓練については、今後も実施時間帯、想定内容、児童への告知の有無等、様々な状況を想定した練習を行い、児童の防災意識を高めていく。地域や家庭とも連携して防災教育を進めていくための方策を検討する。・ここ数年、気象警報や悪天候による引き渡しに年数回あることが見込まれるため、必要に応じてドライブスルー方式の引き渡し訓練を行う。より円滑に保護者を誘導し、確実に児童を引き渡せるよう、教職員の役割および行動の共通理解や、保護者への周知を徹底したい。実施時期は梅雨入り前が望ましい。また、今年度実施した地域防災については、実施後の反省や改善策の引継ぎをしっかりと行って次回に備える。・感染症対策である手洗い指導については、児童により定着度に差があるため、全校指導だけではなく各学年や児童に合わせた指導を行う。・引き続き、感染症対策、熱中症対策には万全を期す。
学校の組織力 向上 教職員の資質能力の 向上	○児童に寄り添い、共に歩む教師 ・小規模校のよさを生かし指導力を向上させるための研修の実施 ・専門性向上に向けた意欲的な研修への参加促進 ・タブレット端末活用能力の向上 ・子どもに向き合う時間の創出及びワークライフバランスにつながる学校業務改善の推進	<ul style="list-style-type: none">・今年度は、昨年度の学力状況調査を分析し、学力の向上の目標を掲げて取り組んだ。全教員が年1回一研究授業を行い、学習指導案の検討、事前・事後研究会を通して小規模校のよさを生かした指導力向上を目指してきた。特に、事後研究会では、授業力の向上を主題に置き、授業改善を行う上で今後どのような授業を進めていってよいか協議した。また、タブレットの活用についての意識は高く持っており、教育センターの専門研修講座を積極的に受け、個々のスキルアップに繋げていった。現在は、コロナ感染による欠席児童の学びを止めないよう、オンライン授業を積極的に行っている。教員同士、情報交換をしながらよりよい授業法を模索している最中である。・学校業務改善の点でも、コロナの影響により中止や縮小を余儀なくされた行事をもう一度見直し、今後どのように行事を実施していけばよいか職員で何度も協議した。また、職員勤務時間に対する意識は高く、残業時間も減ってきており、木曜日の18時を定時退勤に設定し、ほぼ全員の職員が守ることができている。・児童のアンケートでは、「学校生活は楽しい」の部分で昨年を上回っている点は、種々の取組の成果と言え、学校運営上最も大切な部分である。しかし、昨年度に引き続き、否定的な回答をしている児童がいることにも着目し、その原因を究明し、解決していかなければならない。	B	<ul style="list-style-type: none">・学力の向上については、今年度から始まった「未来を創る学力育成三木モデル」の根幹である、全ての子どもたちの可能性を引き出すICT等を最大限に活用した「個別最適化学び」と多様な価値を共有する「協働的な学び」を実現するために、教師が研修を積み、授業改善を進めていく。・今まで取り組んできた業務改善をさらに進めていく。特に学校行事については、3年間のコロナ禍の経験を生かし、行事を精選し、より実りのある学校行事に変えていく。・子どもたちが学校生活を楽しいと感じ、安心して通える学校作りを進めるために、学習指導、生徒指導等をより充実させていく。また、安全指導の観点から、全教育活動を通じて防災教育を推し進めていく。
家庭・地域との連携	○地域に根ざした学校づくり ・広報活動の充実 ・地域の教育力を生かした学習活動の推進 ・地域と連携した諸行事の開催 (コロナ感染状況を見極めながら検討する)	<ul style="list-style-type: none">・今年度は、人数を制限しながらではあるが、教育参観・運動会・学習発表会については、保護者が来校することが出来た。運動会では、PTA競技のプログラムが3年ぶりに行われ、運動場に歓声が響いた。他にも、各学年一度は行うPTAの親子活動でも、学級委員が中心となって児童が楽しめる会を持つことができた。特に、2・3・6年合同で行った「迷走中」という鬼ごっこは、保護者が台本や小道具を準備し、教員も巻き込んで進めたので、親子ともに思い出に残る活動となった。マラソン大会については、地域の方にも沿道で応援してもらえたので、児童はその応援を得て、力一杯走ることが出来た。・今年度は、1月に体育館で書き初めを行った。地域の指導者に來校いただき、手本を見て頂いたり学級全員で作品を仕上げたり、「筆で書く」楽しさを十分味わえる内容だった。・学校ホームページについては、学校行事のたびに意識してアップデートするよう心がけた。昨年度同様、SWAYというインターネットを使った情報発信手段を利用したりして、できる限り学級の様子を保護者に発信した。	B	<ul style="list-style-type: none">・コロナ禍も3年目となり、その状況下での学校生活に慣れてはきた。今年度も地域の方との行事に制限を余儀なくされたが、児童の学校での様子を見て頂ける機会を作ろうと、できうる限りの行事を行った。・教職員のアンケートが0.3ポイントマイナスになっている。一方、保護者のアンケートでは、0.2ポイント上がっている。前年より保護者の学校行事への参加の機会が増えたことが理由として考えられる。学校に関心を寄せ、たくさん協力をしていただいていることを実感する。来年度以降も、工夫をしながら学校・家庭・地域で児童を育む学校運営を行っている。・今後も学校の取組の様子を広く知ってもらうために、教職員全員で学級・学校通信・ホームページの更新に力を注ぎ、新しい方法も模索していきたい。

4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価
・全体を通して、取組に対する課題の抽出が整理されており、改善の方策に具体性が見受けられなど、目頃からきめ細やかな学校運営に取組まれている姿勢を感じた。
・具体的かつ謙虚な姿勢で取り組まれてきたことが伺え、適切な評価が行われていると思う。
・アフター・コロナにおける自己評価と、コロナ禍の自己評価方法の差異の必要はないと思われる。
・日々移り変わる社会の変化に対応するため、評価項目の見直しなど今後検討いただきたい。

5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<ul style="list-style-type: none">・細やかな指導が実践され、小規模校のよさを最大限に生かした取り組みがなされている。小規模校だからこそできる強みを生かし、子ども達の意思を尊重することで育まれる「積極性」や「自信」に大きく寄与しているものと考えられ、評価できる。・インターネットを活用した検索の他、表計算や文書作成など実用性の高いスキルを身に付ける学習ができています。また、アイデアあふれるネーミングを用いるなどして子ども達の学習意欲を向上させていることは評価できる。・個々に寄り添う難しさはあっても、全校で何とかしようとする意識が高い。6年間のスパンで成長を見守り、これからも子ども達に「できる！」喜びが味わえる学習指導を願う。 評価は、来年度の取組への期待を込めて、Bが適切だと考える。
<ul style="list-style-type: none">・社会との関わりに重要な「あいさつ」や「丁寧な言葉遣い」を自然と身に付けることができるよう、実生活に結びついた取組は評価できる。・異年齢集団活動においては、6年生のリーダーシップはよいお手本として受け継がれているのが嬉しい。また、それらを醸成することとどまらず、全校生がそれぞれの役割を認識し、学年を超えた交流に発展するなど、小規模校だからこそできる取組を最大限生かしていることは評価できる。・道徳・人権はこうあるべきものと教えるものでないで大変だが、自尊感情を育みながら進めてほしい。 評価は、Aが適切だと考える。
<ul style="list-style-type: none">・問題行動があった際は、教員だけの判断になるのではなく、子ども(当事者)の話をよく聞き、適正に対処されることを望む。 評価は、Bが適切だと考える。
<ul style="list-style-type: none">・引き続き、適切に取組んでいただきたい。評価は、Bだと考える。
<ul style="list-style-type: none">・引き続き、適切に取組んでいただきたい。・トルコ・シリアにおける大災害を見るにつけ、安全・防災教育の重要性を再認識させられるが、訓練のインセンティブを防ぐとともに、創意工夫を加え、学校のみならず、地域と共に考えるのも一つの方法ではないでしょうか。 評価は、Aが適切だと考える。
<ul style="list-style-type: none">・教員同士で情報交換を行いながら授業法を模索する姿勢や、行事の開催方法を何度も協議されるなど、子ども達のこと、保護者のこと、地域のことを真剣に考えていただいていることに対して、保護者としても非常に心強く感じる。また、運動会・学習発表会に置いて、教職員と児童と一緒に頑張っている姿を拝見させてもらい、小規模校の利点である教職員の児童に対する目配り・気配りが確認できて良かった。・人生帯に修行・勉強だと思いついて、様々な人々とのかわりの中で自分を振り直しながら、子どもと共に頑張ろうとする姿勢を大切にしたい。・教員が子ども達とよりよい関係を築くため、健康であることはもちろんのこと、小学校が働きやすい職場であることは必須であるため、引き続き、定時退勤等を励行していただきたい。 評価は、Bが適切だと考える。
<ul style="list-style-type: none">・コロナ禍における各種行事の実施に制限があったものの、学校・家庭・地域各自で創意工夫をしながらの行事参加となり、完全とまではいかなかったが、ある程度の成果があったのではないだろうか。・地域を取り込みながら行事を実施されていることは大変だが、とても意味のある子ども達の体験だと思う。これからも積極的に関わり、勉強を進めてもらいたい。・情報社会にありながら、紙で配布される学校通信を楽しみにされる方もいらっしゃるため、更なる内容の充実を期待したい。 評価は、Bが適切だと考える。